

営していたので、戦犯として獄死した。二十三歳から六十歳ぐらいまで営々として働いた。昔から中国にいったので支那事変とは関係ない。同じ引揚げでも筋が違う。営々と築いたものは全部没収されてしまった。

継母が一人で父の遺骨を持って引揚げて着た。継母は商売も知らず軍隊へ行ったし、無一文だった私を、足手まといと思われたので別居をした。私はしばらく富山の伯父のところ、約一か年ぐらい厄介になっていたが、随分苦労した。その後伯母のところ（富山の薬屋）で手伝いをして結婚、自立をして現在に至っている。

仏印での勤務、復員後の商売のことなど思い出すと、随分長いような短いような気がするが、ぬるま湯に浮かったような生活はいやだったので、積極的に進んだことが、私の今日を築いたわけです。

ボルネオ・パリックパパン

二十二特別根拠地隊

長崎県 松田正富

—松田さんは海軍だそうですが、志願だったのでか、勤務はどこだったのですか。

私は大正十四年八月生まれで、昭和十八年四月の志願で、佐世保相之浦海兵団に入団です。三か月後に大村航空隊へ入隊、十月頃に二十二特別根拠地隊へ転属しました。「特根」では水上飛行機の整備をし、最後まで整備兵でした。

昭和二十年のはじめに、パリックパパンに連合軍が上陸したので、油田の全部のバルブをあけて火をつけ、何日も燃えつづけていました。水上機の部隊だったが、内地から飛行機が飛んでこないのが一般の兵になった。

—ボルネオの兵力は少なかったもので、連合軍の上陸では相当苦しい戦いであったと聞きますが。

「特根隊」の戦闘力は大きくないので、陸軍と共同して防衛にあたったわけです。

私達の部隊は、基地に敵が来ているというので、切りこむ前に偵察にいった。我々三人は現地人一人と一緒に出発したが、私は二人を途中に残し、「若し私たちが何時に帰らぬ場合には隊へ帰ってくれ、我々は死ぬかも知れないから」と言いのこと二人で進んで行った。

私たちは敵に見えられたら、すぐ手榴弾を投げねばならない。ジャングルのなかで偵察していたが敵に撃たれ、溝にすべりおち、水のなかに何時間もくぐったりしていた。

私たちに命ぜられたことは「防空壕にある爆弾や弾薬を敵に取られる前に、壕にガソリンを充滿させて爆発させること。敵情を偵察すること」の二つでした。我々は爆発はさせることが出来た。ものすごい爆発でした。

のこした二人は時間まで待ったが、我々が帰ってこないし「相当弾を撃ちおったから、駄目だろう」というので本隊へ帰っていった報告した。隊の方でも、我々ももうやられたと思っていた。

敵は我々に対してドンドン撃ってくる。片方が海だから我々は取りのこされてしまった。本隊までの距離は十キロぐらいか、帰るのに五時間も遅れてやっと帰った。

—バリックバパン上陸の敵はドンドン攻めて来たのですか。すか、第二十二特根隊はどう戦ったのですか。

我々水上機部隊は特根本部司令部とは相当離れていた。私たちの部隊の飛行兵と助手の整備兵や病人はジャワに引揚げ、元気な人だけ残った。

連合軍は、バリックバパンとバンジェルマンの間の補給路をたとうということでありました。そこで、陸軍に併合して、第八中隊というのを編成した。混成だから隊長は自分と関係のない人で、隊員同志誰が誰だかわからないが、そこは日本軍だ。その敵を攻撃して、しりぞかせて、補給路を取り返した。その時には高台から相手を不意うちにしたので、撤退させることができた。敵は船で撤退していった。

その時の兵器は、飛行機からはずした旋回機関銃や向こうで出来た手榴弾、それぞれ小銃や拳銃を持った人もいた。飛べない飛行機がいくらでもあったから、機関銃

をはずして固定させたのを持っていた。独立第八中隊といっても名だけで二十人もいない。そのなかで途中で倒れる者もいたが、私が一番若かった。召集兵、国民兵もいた。

私たちの部隊がパンジェルマンのまちに着いた時、終戦は知らないでいた。「米軍の飛行機が飛んで来てものにもせん、おかしいばい」と思いながら、その時「四分六分で日本が勝った」と大騒ぎをして、酒など持ってきて「本当に日本が勝ったんだらうか」。そのうち、日本が負けたとわかった。

—ボルネオでは、終戦近い時に連合軍と戦ったので情報が多分ではなかったわけですか、収容所の生活はどうでしたか。

今度は連合軍が戦車でやって来て武装解除をさせた。お守りからなにか全部取られて、針一本も持たせないんです。それから収容所に一か年おり、労働をさせられた。食事は、ただの蒸パンのような物と、バター少々が昼の作業用弁当。待遇はそりゃ、とてもじゃない「マスカ」ですね。収容所内の食事は、十五オンスの空缶一杯

のメリケン粉と乾燥野菜とコンビーフ少々、米が二十粒ぐらいはあったらうか。それで十か月いた。

仕事に出る人はなんとか、かっぱらっても食べたが、病気の人はもう、皆死んでしまった。収容所は三千二百人とか聞いていたが、ほとんど一日に四、五人死んでしまった。帰る時には一千三百人おるかおらぬかになってしまった。南方でも労働や食料不足のためにたくさん死んでいる。

また内地へ送った給料は一銭も家へついていない。あれはどうなったのかと、今でも疑問に思っている。なにひとつむくわれなかった。

—苦しかったことは、それから戦後は。

戦闘中は、弾はどんなに撃つてきてもこわくはなかった。三か年戦場にいたのだから苦しみはあったが、私は志願兵だから戦闘しても覚悟していた。だが終戦後からは苦しかった。食料の不足がなんともいえない。その時体重は三十キロになってしまった。よく三十キロで歩いたと思う。いま私は六十キロあるが。

あのとき、連合軍の使役労働から帰ってくると、まず

病氣して寝ている人がいると、誰にでも「あなたは食べられるか」と聞いて「食べない」といえば、それをもらって「頑張れよ」という。本当にいま思っても苦しい思い出です。そんなことをして、やっと帰って来たのだから。

私は帰って来て二か月は寝込んだきりだった。うちの家族では、三男、四男は戦死、一男は長崎原爆で死んだ。長男は内地だったので帰って来た。五男の私はやせおとろえて帰って、働くこともできない。友達が見舞に来て、元気なその人がにくらしく思うほどだったが、いま思えば、よく生きのこったと思っています。